

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

山梨県立大学
宮崎 のぞみ

1. 留学目的と活動内容について

2019年12月16日から2020年8月20日まで、ニュージーランドに留学させていただいた。山梨県立大学では「保育」を専攻しており、基本知識や理念、また子どもへのアプローチを実践等を通して学んできた。それらには国や思想、園ごとによって「違いがある」と、言葉として分かってはいたものの、実際に理解しているとは到底言い難かったと思う。「違い」があることを体験的に知ること、また、抱いた疑問や理想に対しての自分なりの答えを求めて、留学を決意した。

ニュージーランドでは、目的であった「保育現場の訪問」だけでなく、「留学」というシステムが持つ、他言語での他者とのコミュニケーションや歴史や文化、人々の違い、などについて身を持って感じる事ができた。

2. 保育ボランティアの実施～保育園・幼稚園・小学校～

留学中の3月初旬からコロナが流行し、1か月半のロックダウン、その後も強い規制がかかっていた。そんな中で訪れることのできた保育・教育施設について、それぞれの特徴とそこで学び感じたことを事例を交えながら述べていく。

(1) Ara Early Learning Centre (保育園)

期間：2020年7月6日(月)～2020年8月6日(木)

毎週月曜日～金曜日 午後1～4時

幼児(3～6歳)と乳幼児(1～2歳)に保育室が分かれ、縦割り保育となっている。Ara Institute of Canterburyの教員や学生が利用することのできる施設となっており、そのため子ども達の国際色は大変豊かである。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



・園の特徴

関係（Relationships）に何より一番の重きを置いている。それは子ども同士だけでなく、保育者と子ども、また保護者や地域のように、子どもを中心に広がる相互の関係を大切にしている。子ども達の主な活動は自由遊び（Free play）であり、保育者は観察—見ること、聞くこと（Observation—watching, listening）を保育の中で大切にしている。その子どもが今何に興味を示し、どんな活動（遊び）を展開しているのかを注意深く観察する。子どもの世界に入るときは、彼らが何かに困っている時や、ポジティブな働きかけができる時である。保育者は環境整備に力を注ぎ、子ども達の遊びが十分に深められるよう、また新しい気づきがあるよう、工夫を凝らす。（例1）

子どもが何かよくない行動をした時、その時こそ子どもを深く見ることのできるチャンスだと考えている。彼らがなぜそのような行動をしたのか。彼らが今必要なのは「ダメな子ね！（Naughty/bad girl/boy!）」という言葉ではなく、ただ抱きしめてほしいだけかもしれない。いつでも子どもを尊重し、助ける気持ちで接している。

また Ara Early Learning Centre では昼食の時間が設定されていない。それは、自由遊びを重んじているのに、なにか特定の時間軸を作ってしまうことは子どもの遊びを中断させ、深い遊び込みを邪魔することになってしまうという考えからくるものだった。子ども達は各々のタイミングで昼食を取り、またそれを一度ではなく何回かに分けてする子どももいる。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書



・事例 1

ニュージーランドで「Matariki」(日本でいう七夕のようなもの)という季節の行事が近づいてきている時だった。保育者の一人が紙で星を作り始めた。子ども達は近くに寄ってきて、一緒に作ろうとした。できたものに紐を通し、せつかく綺麗だから飾ろうと保育者は提案する。この一連の流れの時、保育者から「なぜ」これをしているのかという「学びの意図」が提示されることはなかった。保育者は環境整備や準備は子ども達に対する「little hints」だと捉えている。子どもを椅子に座らせ指示をし、何かをさせることは簡単だが、子どもの興味を汲み取り、その姿を予想しながら用意することは楽ではない。しかしそこに面白さがあると保育者達は考えている。後日 Matariki の日に、天井から吊るされた星と昔話との関連性に気付いた子ども達の姿は多様で、どれもそれに興味を示している様子だった。

(2) Rudolf Steiner School (幼稚園)

期間：2020年7月27日(月)～2020年7月29日(水)

月曜日～水曜日 午前8時45分～午後3時

ドイツ、シュタイナーの思想に基づく保育が展開されており、幼稚部から高等部までが同じ敷地内に設立されている。幼稚部においては4～6歳の縦割り保育となっており、人数の上限が18人、保育者は各クラスに2人ずつである。その他乳幼児クラスが1つ設置されている。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書



・園の特徴

シュタイナー式保育の特徴的な、自然のものを遊び道具にすることが忠実に再現されており、子ども達は遊びを通して「どうやってするのか」という学びの基礎作りをしている。

保育室には数えきれないほどたくさんの活動道具が用意されており、その全てが自然のものを素材にできている。それは例えば、木のかげらや布、木のブロック、ひも、はしごのようなもの、石、クリップだったりする。また人形とおままごと道具のようなものも置かれている。いわゆるレゴブロックや車のおもちゃのようなものは置かれておらず、「できているもの」ではなく、子どもが何の素材を使い、何を創造していくかのプロセスを大切にしている。保育者は子ども達を「見守り(彼らがどんな状況であるかを把握する)」、環境を整えていく。その間、曜日ごとに決められた活動を行っており、自分で遊びを見つけ出すことが難しい子どもは自分の意志でその活動に参加することもできる。(※)

一日の大まかなスケジュールが決められており、時間になれば子ども達は片づけをしたり、中から外遊びへ移ったり、一緒に昼食を囲んだりする。次の活動に移る時保育者はそれを強要せず、前もって声掛けを始める。例えば「もうすぐお片付けの時間ですよ」と歌いながら伝えたりする。スケジュールが決められているといっても、厳しいものではないので、その時の子どもの様子に合わせてゆっくりと次へ移行していく。

子どもの遊びに大人の手はいらないというのが基本的な考えで、むしろそれは子どもの遊びの世界を中断させたり邪魔となったりしてしまう。子どもは自分達で深い遊びを創造することができるため、保育者が従事すべきは「観察」と「補佐」なのだという。

※曜日ごとの活動

Support activity と呼ばれ、室内遊びの際に保育者が率先して行う。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

この園では、月：baking（ベーキング）、火：sawing（縫い物）、水：drawing（お絵かき）、木：painting（塗り絵）、金：wax（ワックス）と決められていた。生活に関連したものを多く取り入れている。

(3) West Spreydon School（小学校）

期間：2020年8月11日（火）、2020年8月12日（水）

午前11時30分～午後3時

ニュージーランドでは、幼稚部から初等部への移行期間に Year0（年長と小学校1年生の間）の期間が設置されている。5歳の誕生日を迎えた次の日からこの Year0 に移ることができるが、その日は決められておらず、子どもとその保護者によって決めることができる。



・学校の特徴

年齢によって教室が分けられている。どの教室でも授業では子どもの学習段階に応じてグループが作られ、例えば同じ「読み書き」の授業をしても、取り組む学習はグループごとに異なっている（ability group と呼ばれる）。しかし教師が何か話す時や、子どもたちが特別に個人で取り組む必要のない時（テキストなどを使って読み書きをしない場合）、椅子には座らず教室の一角に集まり、教師と子ども同士がお互いに近寄って活動を進める。

Year0 の教室の壁には子どもたちが作った製作作品や、数・形・色についての壁面装飾がなされていた。授業の中で「世界を旅した」ので、「習字」や「桜」などの作品も見られた。子どもたちの国籍も様々で、「いろんな国の文化を知ること」はニュージーランド教育の一部になっているようだ。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書



(4)そこからの考察

ニュージーランド保育・教育の現場をいくつか訪問させていただいて、一貫して感じたことは、「子どもの力を信じ、興味の赴くままに育ちを応援している」ということである。保育者の一人の方とお話させていただいた際の言葉が、これらのことを要約してくれているように感じるので、ここにご紹介させていただく。

「みんなが揃ってできるようにならないければならないことは何もない。例えば『ハサミを使うこと』これは子どもにとって難しいことだが、アートや製作に興味のない子どもがハサミを使えないことに何の不便があるだろうか。子どもが何か目的を持って活動を行う時、それに応じて自ずと必要となるスキルを子どもは身に着けることができる。それは子どもが自分の道の選択として決めていくものだ。その一つひとつの違いが個性であり、輝いていく部分だと思う。」

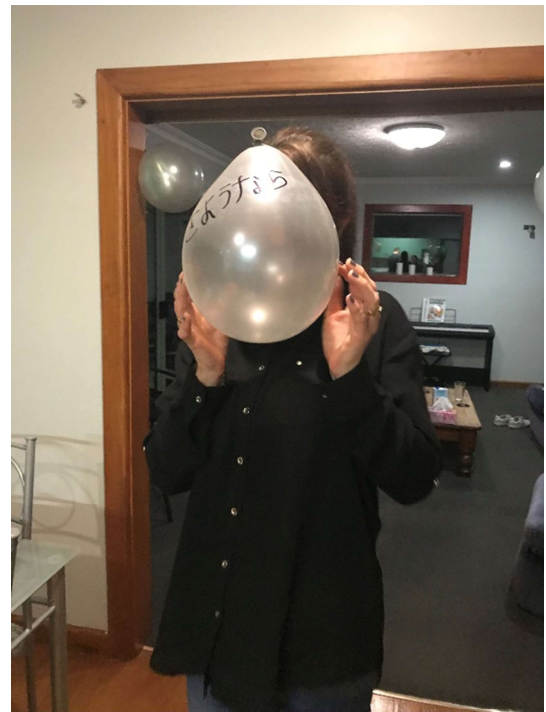
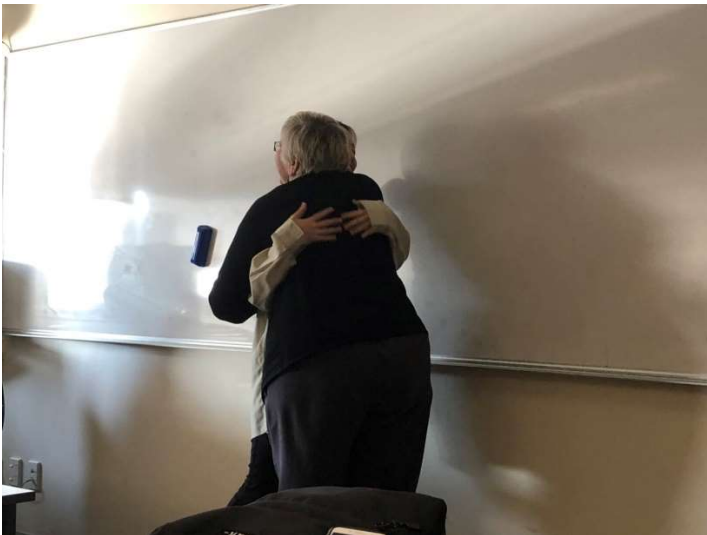
3. 学校生活とホームステイ

様々な国から来た人がそれぞれの目標を持ち集う学校では、刺激を受けることも多かった。「英語を学ぶこと」のその先にあるものの大切さや、いい意味で、語学(英語)は一つのコミュニケーションツールでしかないということを感じさせられた。何かを感じ、それを伝えたいと思った時、私達は幸運にも「言葉を話す」という方法を使うことができる。私はまるで子どもが言葉を覚えていくように、「伝えたい」という気持ちを源にして、英語に向き合っていた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

ホストファミリーとの出会いは私にとって大きなものだった。家族のようでまた、友達のような彼らと過ごす時間はいつでも心地よく、私を豊かにしてくれた。私がいなくなることを「変な感じがする」と帰国前によく言ってくれていたが、帰国後私が実家で感じたことも同じだった。「いない」ことを「変に」思う。それだけの日々を与えてくれた彼らに感謝したい。

ニュージーランドは私の故郷ではないし、「帰る」場所でもない。すべてのことが素早く過ぎ去り、いい記憶として残っていて、まるで夢の中で起きたことのように感じてしまう。そんな日々を私はいつまでも思い出しては心が温かくなるのだと思う。自分にとっての新たな「Home」ができたと、今はそう感じている。



4. 今後について

留学を通して、いろんな方法ややり方があることを学び、私自身もそれらを選択可能だと知った。また多くの人と関わり、自分とは違う考えや、似たものに感化され、自分自身が内側から広がっていく感覚がした。「視野が広がった」と、感じる。

一つのことに對する「やり方」は、無限にあった。私がかっているものと真逆の方法で実践する人にも出会った。私達は、信念を基にして自分の方向性を切り拓いていくことができる。心が感じる方へ、その長い道のりの一歩目を踏み出したいと思う。